

(1) - 1) 野生復帰事業の波及効果としての地域ブランド形成 - トキ・コウノトリ -

国レベルのプロジェクトとして野生復帰と地域活性化の取組が長期に渡って行われた結果、行政を主導にした各種の働きかけが活発化し、マスメディア等に連続的に取り上げられることになった。これにより認知度が向上し、地域への浸透が進んで生きものブランドが形成された事例。

特に新潟県佐渡市のトキと兵庫県豊岡市のコウノトリは著名であり、ブランド活用として米(トキ米、コウノトリ米)、各種土産物類、環境教育、観光・エコツーリズム等、幅広分野で取組まれている。



写真：放鳥されたコウノトリによる子育て

(「いきもの通信」コウノトリの里公園 2008 年)

①野生生物着目の動機・背景

■トキ

トキはかつて日本全国の里地里山に生息していたが、美しい羽を狙っての乱獲や、棚田の減少や農薬などの環境悪化で各地から姿を消した。

1934 年天然記念物、1952 年には特別天然記念物に指定された。1993 年には国内希少野生動物種に指定され保護増殖計画が定められた。さらに 1999 年鳥獣保護及び狩猟ニ関スル法律により保護増殖を特に図る必要がある鳥獣に指定。2003 年鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律により希少鳥獣に指定され、同年環境省は「トキ野生復帰環境再生ビジョン」を策定し、飼育下で繁殖したトキを野生復帰させることにした。

半世紀にわたる保護と 30 年に及ぶ増殖の取組の結果、日本産トキは絶滅したものの(2003 年)、1999 年中国から寄贈されたトキの人工増殖に成功、2008 年には放鳥が実現した。2012 年には野生下での繁殖も確認され、国家レベルでの保護増殖活動の成果がようやく実を結ぼうとしている。こうした活動が波及する形で地元佐渡島では里地里山保全や環境保全型農業、環境教育・エコツーリズムなどの分野でトキを軸にした島づくりが取り組まれている。

■コウノトリ

国の特別天然物に指定されているコウノトリは、かつて日本各地にいたが明治時代以降の銃による乱獲や環境悪化で見られなくなった。また太平洋戦争中、営巣するマツの木が燃料として伐採されたことも拍車をかけ、戦後は兵庫県豊岡市周辺でしかいなくなった。

1965 年、野生のつがいを捕獲し人工飼育を開始。40 年の歳月をかけた取組の結果、飼育数が 100 羽を越えたことから 2005 年放鳥された。

国や県・市が主導する上記野生復帰事業と呼応して、周辺農家による減農薬農業や冬季湛水の取組とコウノトリをシンボルにした米の販売、近くを流れる河川水系の湿地を拡大しヨシ原を保全する自然再

生活動や各種エコツアーなどが行われており、地域の活性化に結びついている。



写真：順化ケージに移動するコウノトリ（「いきもの通信」コウノトリの里公園 2004年）

②野生生物の状況

■トキ

ペリカン目トキ科の鳥。学名は「ニッポニア・ニッポン」で日本を象徴する鳥である。新潟県の「県の鳥」、佐渡市と輪島市の「市の鳥」に指定されている。

体長で約 75cm、翼開長は約 140cm。古典的な分類ではコウノトリの仲間とされる。全身はまっ白だが、羽を広げると「トキ色」という美しい赤色をしている。顔は赤く、長くて黒いくちばしで、田んぼや草原などでドジョウ、タニシ、カエル、サワガニ、バッタなどを餌とする。また田んぼや草原に近い森の、見通しのよい高い木の上に営巣する。このため、水田の生きものが豊富に生息する山間地域の棚田などは特にトキの餌場・営巣地として好適であったと考えられている。繁殖に際しては、オスとメスは 1 羽ずつカップルになり、くちばしを使った羽づくろいや小枝をくちばしでわたすなどの光景も見られる。4月上旬から産卵しカップルで卵を温め、約 28 日でヒナが孵る。親鳥はその後 40 日から 50 日ほど世話をし、巣立ってから 2～3 年ほどで成鳥となり、卵を産むようになる。

1981 年の佐渡における全鳥捕獲後、日本産トキの保護増殖が試みられたが、失敗。2003 年には「キン」の死亡により日本産トキは絶滅した。一方で 1999 年に中国から寄贈を受けたトキのつがいによる繁殖事業が初めて成功し、その後佐渡トキ保護センター内で飼育数は順調に増えた。2007 年からは順化ケージによる飛行訓練を行い、2008 年より毎年放鳥されている。

放鳥により天敵の被害にあうなどして死亡する個体も見られ、また期待された野生下での繁殖がなかなか進まなかったが、放鳥開始から 4 年後の 2012 年になりはじめて野生下でのひなの誕生が実現している。

■コウノトリ

コウノトリ目コウノトリ科に属する鳥類で別名、ニホンコウノトリ。全長約 110～115cm、翼開長 160～200cm、体重 4～6 kg の大型の水鳥。羽色は白と金属光沢のある黒で、クチバシは黒味がかかった濃い褐色。脚は赤く、目の周囲にも赤いアイリングがある。

餌としてはザリガニなどの甲殻類やカエル、魚類を主に捕食するが、ネズミなどの小型哺乳類を捕食することもある。餌をとる場所として田んぼをよく利用しており、田植え後などには稲を踏み荒らすの

で追い払う対象である一方、巣作りにはおめでたいいわれもあり、里の人々の生活域の中の鳥として定着していた。繁殖は、主に樹上に雌雄で造巣し、1腹3～5個の卵を産む。抱卵期間は30～34日。抱卵、育雛は雌雄共同で行われ、孵った雛は、約58～64日で巣立ちする。

1965年に兵庫県豊岡盆地において野生のつがいを捕獲し、人工飼育。40年にわたる増殖事業の結果飼育数が100羽を超えたことから2005年に放鳥を開始。翌年産卵するが孵化せず、2007年になって1羽が孵化し、その後無事巣立った。野生下での巣立ちが見られたのは1961年の福井県での巣立ち以来46年ぶりのこととされる。現在、民家の近くなど人の暮らしに近いところでも営巣するようになっている。

③保全活動の状況

■トキ

トキのえさ場を確保するための棚田の保全、ビオトープ作り、農薬をなるべく使わない稲作、稲刈り後にも田んぼの水を落とさない冬季湛水、営巣のため森林を保全整備する活動などが行われている。

活動主体は、地元住民や農業者だけでなく、島内外のボランティアや市民団体、小学校から大学までの教育関係機関、企業などの積極的な参加も見られる。環境省は2015年ごろには佐渡で60羽のトキが人間と共生することを目標に掲げており、こうした数値目標も地元の保全活動のモチベーションを高めている。



写真：棚田におけるビオトープ作りの活動（佐渡島）

■コウノトリ

コウノトリはいろんな生きものを餌として利用する特性があるため豊岡では放鳥と共に生物多様性の回復を掲げた社会構築を目指している。自然再生を基本としながら、湿地保全と造成、ビオトープ整備、水田と河川の連結、冬期湛水などの準備をはじめると共に米作りにも減農薬等の新たな農法が導入されている。

④利活用の方法

■トキ

トキのえさ場づくりを目的とした棚田の保全やビオトープ作り、営巣地づくりを目的とした森林整備

活動など、保全活動プログラムから派生したエコツーリズムが盛んに行われている。学校などの教育ツーリズムの他、企業等の研修や一般の参加者などにも利用されており、ホテル施設を「トキ交流会館」として改修整備して、訪れるボランティアへの宿泊や情報提供などの便宜を図っている。

特産品開発等の分野では、トキ保全活動をシンボルにしたトキ米などのブランド米をはじめとする各種の土産物が開発されている。新潟県が行っている「朱鷺と暮らす郷」認証制度は、「いきものを育む農法」で栽培された佐渡米をトキをシンボルとした生きものマークにより認証するとともに、売り上げの一部を「佐渡市トキ保護基金」に寄付するというもの。水田・水路における江（深み）の設置、ふゆみずたんぼ（冬季湛水田）、魚道等水路の設置、ビオトープの設置など、トキをはじめとして、魚・昆虫・サギ等等水田周りの生物多様性に配慮した米づくりをブランド化し推進する取組として注目されている。

この他地域の発信活動全般にわたってトキがシンボルとして使われており、トキ効果を広報面からも利用している。

■コウノトリ

コウノトリを育む農法による米作りによって、米のブランド化が図られている。また、コウノトリをテーマとしたツーリズムも盛んになっており、豊岡市では放鳥前に10万人程度の観光客数であったものが、放鳥後は一時40万人を超え、その後も30万人程度の観光客が訪れるようになっている。

また、コウノトリは比較的長距離を移動する傾向もあるため、移動先の地域との交流も行われるようになっており、こうしたことも地域を超えた連携や活性化に役立っていると指摘されている。

トキ・コウノトリ双方の事例とも、長期間にわたった国家プロジェクトによる野生生物保護・増殖事業の結果、当該生物が地域の価値として認識され対外的な認知度や地元意識が向上し、地域ブランドとして利用されていった点が特徴的であると言える。



写真左：トキ交流会館



写真右：コウノトリ育むお米（JA たじまホームページより）